

義主国鉄
の獄地正

特253

615

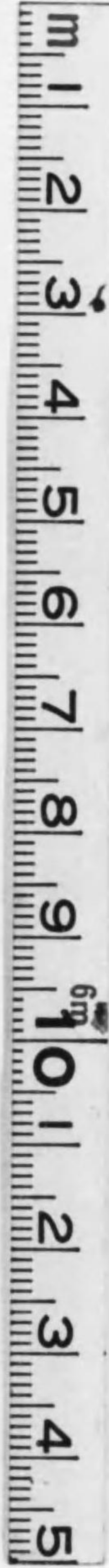
574

ス・ニ
パ・ル
を
す
る

10^セ

尾瀬敬止著

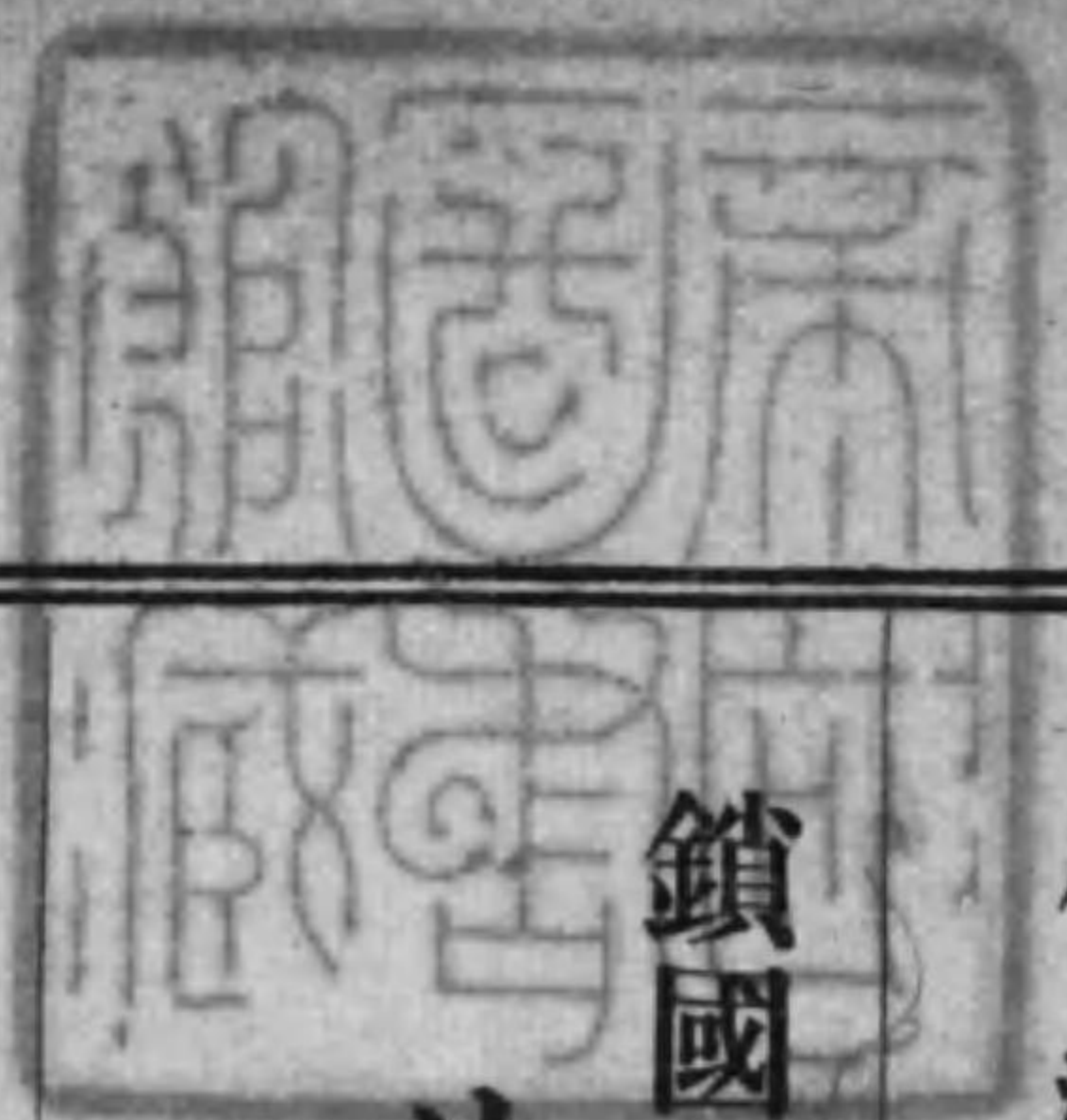
大陸書院版



始



特 253
615



尾瀬敬止著

鎖國主義肅正地獄の
ソ聯をスパイする

大陸書院版



目次

一、鐵扉に閉された専制國……………	(三)
二、全土を震撼した裁判事件……………	(四)
三、肅正地獄の餘焰……………	(九)
四、二人の失踪公使……………	(二二)
五、白晝ミルレル將軍拉致さる……………	(一六)
六、自由——死刑——銃殺……………	(一九)
七、ゲ・ベ・ウの後進新選組「グゴボズ」……………	(二二)
八、「日本人スパイ」とは？……………	(二四)
九、反ソ的怪放送を聴く……………	(二九)
一〇、大きな悩みをもつソ聯……………	(三三)

鎖國主義肅正地獄の

ソ聯をスパイする

尾瀬敬止著

一、鐵扉に閉された専制國

元來、ロシアは、その國の青空がいつも暗澹としてゐるやうに、國內の情勢は決して明朗であるとは言へまい。これは、特に戰時體制下にある時に著しいが、平時においても餘り變りがない。と言ふのは、あの日露戰争後の革命騒ぎがあつた時などは、「國民の魂を凍り付かせてしまへ！」とかなんとか喚く、或る亂暴な政治家が俄かに飛び出したことでも略ぼ想像される。それほど左様に

帝政時代のロシアは、鐵扉に固く閉されたごとく峻厳な専制國だつたのである。四

一一、全土を震撼した裁判事件

かういふ珍しい専制國には、何よりもさきに、普通に言はれる警察制度がちやんと確立されてゐる。しかし、一方では、『秘密警察』(オフランカ)の制度も強化されてゐることは斷るまでもない。この特殊な政治警察は、いろ／＼な使命を有つてゐるが、革命黨の出現を警戒し、その黨員を捕縛することを主な目的としてゐたのだ。何故なら、日露戦争が終つた一九〇五年から六年にかけて、この國の革命黨員たちは、ロシアが敗れたことを口實として、猛烈な反政府運動を起こした。同時に、諸工場の労働者はストライキをはじめ、時には恐しいテロも演出したからである。

それは兎に角として、當時の『秘密警察』制度は、大體左のごとくであつた。陸軍少將グロバチエフを首腦者として、その配下に二百五十人の警察員(オフランニク)が雇はれて、露都の秩序を保つてゐた。だが、皇帝の常住地であつたツァールスコエ・セローの警備は中でもきびしく、宮殿のまはりには百人を、また近郊には十二人の警察員を置いてゐた。ところで、爰に變つてゐると思

ふのは、その中から宮廷劇場にも十七人の者が繰り出されてゐることである。

こんな風に紹介すると、『秘密警察』制度は、その人員數において、餘りに少きを思ふ讀者があるかも知れない。だが、次ぎの一エピソードの内容を知つたら、かれら警察員の活動振りがいかなるものであるか察せられよう。と言ふのは、社會民主黨員として有名な N・チヘイゼが、時局對策相談會と言つたやうなものを開いたことがある。その時集まつた人々は、多少とも知名の士である十四人だつたが、意外にも、この中に秘密警察署長が混つてゐたといふ話だ。

もつとも、ロシアの警察制度は、單に革命黨員ばかりに峻厳しんげんなのではない。その事は、俗に『黒い事務室』と呼ばれる郵便物検閲局の手厳しさを見ても判るので、いはゆる雲上人うんじやうびとの手紙も決して浮ばれない。ここには、どちらかと言ふと、高位高官の重要な文書が集まるのだが、そんなことは一向に氣にも止められないのだ。特別に雇ひ入れられた局員——中には二十ヶ國の國語に通じてゐる者もある——、さうした文書を身勝手に開封し、通讀する。そして、必要がある場合には全文又は一部をうつし取る。時によつては、此れをすつかりカメラに収める事さへある。ところで、この災厄に會つたのは、嘗てキエフの縣知事をしてゐたイグナチエフの、いろんな怪しい手紙だつた。いや、それよりも、ウイツテ伯と言ふやうな、さういふ儼とした内閣總理大臣の社會問題を論

じた文書までが目を光らされたのであつた。もつと凄惨な例を挙げると、雲の上にある筈の宮廷人の認めたものだつて、この關所は自由にパス出来なかつたのである。

無論、「黒い事務室」の本局は、かのニコライ二世が在住した、昔のサンクト・ペテルブルグにあつた。モスクワ、キエフ、オデッサなどには、その支部がそれ／＼設けられてゐた。この中でも、キエフの支部は、とりわけ積極的に活動をしてゐるやうに見えたが、それには次ぎのとき驚くべき理由がひそんでゐた。つまり、その一部の局員は、敵國ドイツばかりでなく、オーストリーの間諜的行爲まで働いてゐたのだ。言ふまでもなく、これは——歐洲大戰當時の事である。無理もないといふのは、前後五十年間、すこぶる妙な政治的イデオロギーをもつて、さういふ検閲局の支局長をしてゐた、カール・ジーウエルトと呼ぶ老スパイもゐた。かれの手先は多かつたが、その主な子分ハルダック以下三名は、いづれもドイツの國籍を有つてゐたのである。

さすがに悪運が強かつたジーウエルトも、いつか囹圄の人となつたが、その法廷における陳述はまことに全ロシアを震撼するに充分であつた。これに依ると、彼は、いかなる手紙でも、それが自分の探偵的興味を誘ふと、きつと開封して見る。たとへば、一九一一年には、こんな何人にもちよつと想像されないやうな、大それた冒険をやつてゐる。それは、ニコライ二世がキエフを訪れた時

のことで、警護の重任を背負つたクルロフ將軍は、かれが管轄下にある「黒い事務室」に向つて嚴命を下したものだ。

「どんな場合にも、皇族方の御書面に手を觸れてはならない」

ところで、皇后から軍司令官や諸提督に宛てた幾つかの手紙を、わざ／＼寫真にまで撮つたのは他でもないジーウエルトだつた。かうなると、例の怪僧ラスブーチンの秘密の手紙なんかは朝飯前である。一方、彼は、お仕舞ひになると、平氣で秘密警察署の書類も覗くやうになつた。その上に敵國オーストリーの首府——ウィーンに、ひそかに傳達したと言ふから、映畫のロマンス以上に超特作ではないか。

もつとも、ジーウエルトが、いくら「名探偵」であつても、上に述べたやうな大芝居がアタマだけで打てるものでない。最初、彼は、水蒸氣の力で手紙の封筒を開けるといつた風な、蓄電池様の小さな機械をドイツから買ひ込んだ。だが、それに満足しないと、封蠟を溶かすために一本のあたためて使ふ特殊な針を發見した。そして、この變な針の先きに、中にある手紙を巧みにくるませて出したり、また入れたりして、あらゆる手紙の秘密を覗き出したと言ふのである。

若し、單なる手紙がさうだとしたら、他のヨリ多く公開的で複雑性をもつた新聞や著書などが、

さらに壓迫を加はへられるであらうことは明白な事實である。と言へば、嘗てロシヤ文壇の雄であつたアルツイパーシエフが、ソヴェート政權に反對して、或る期間（？）新聞を發行した事があつた。この新聞は、最初『朝』といふ名前で出されたが、たちまち發禁を喰つたので、今度は『晝』と改めた。ところが重ねてまた同じ災厄に逢つたので『夕』と變へたが、その改題も忌違にふれたらうと社を閉鎖したといふエピソードがある。

これに似たエピソードは、各種文筆家の著書にも残されてゐて、その數字はちよつと擧げられない位である。例の文豪ゴーリキーが、

「檢閲官は、茶園内の小豚のやうに、原稿のまはりを彷徨してゐた」

といふ言葉は、もはや有名になつてゐる。そして、かれの原稿——『どん底』の中には、『浮浪人の巢窟』と『夜の訪問』といふ二つの文章があるが、これは不可いとあつて出版を禁じられた。理由はすこぶる簡單で、酔ッばらひに勝手な管を卷かせたり、悲惨な談話をさせたりすることは、一般國民のために宜しくない、と。しかるに別な小説の原稿は印刷に附してもいいが、妻君の選擇法や、女の良否が説かれてゐるから、「この本は婦人に賣るべからず」とのお達しであつた。いや、さう書いた紙片が、表紙の上に麗々しく貼りつけられたものなのだ。これは、滑稽以外の何物でも

ないが、普段から官憲に睨まれてゐたチエルヌイシエフスキーといふ名家の訃音を傳へた一雑誌が沒收されたなどは、どう見ても餘りに過酷である。

三、肅正地獄の餘焰

一口に壓迫と言つても、それが手紙だとか、まづ出版物だとかに加へられてゐる間は、まだ問題が小さい。しかし人間そのものに及び、體刑さへあるか、生命を奪ふに至つてはいよいよ問題が大きくなる。先頃來の喧ましい肅正工作などが——この典型的な現れであらう。

ソ聯の肅正工作は先づ、政治家から始まつて經濟家に伸び、やがて軍人連を斃した。それから、外交家、飛行家、藝術家達にも飛火して行つたやうである。この間に、かれらの平生の行動を監視し、時には檢束又は送獄の重大な使命を帯びてゐるゲ・ベ・ウの元長官なんか捕へられたことを忘れない。そして、今まで審判者の位置にあつた者がたちまち落伍し、哀れにも被告房に立つと言つたやうな悲喜劇もあるらしい。だが、一體、その犠牲者は幾人位あるのだらうか。誰かが言つたやうに、三十萬だとか、三百萬だとかと見るのは、チト算盤のケタが外れてゐると思ふが、相當數に

上つてゐることは確かである。

最近の海外電報によると、豫て噂されてゐたやうに檢擧の手は、いよ／＼外交界にまで伸びて行つたやうだ。リトウイノフは、まだ外相の椅子に坐つてゐるらしいが、外相の代理をしてゐたことのあるカラハンが、他の政府高官七名とともに逮捕されてゐる。その理由はよく判らないが、「何れも祖國に對する反逆テロ行爲、某外國に對する間諜行爲の廉により」と報ぜられてゐる。果してさういふ陰謀を企てたものかどうかは判らないが、このカラハンは、とにかく相當の外交的手腕をもつてゐる人物であつたと聞いてゐる。と言ふのは、あの「日ソ協定」が出来上る前のことだが、或る日の北京において、當時の芳澤公使と彼とが初めて逢つた場合がある。それは、さる人が少し考へがあつて引き合はせたのであるが、この會合が終つた後、公使はかう言つたさうだ。

「カラハンといふ男は、ポリシエキキーには似合はぬほど明朗で、立派な外交官だね」

方、カラハンは、次きのやうに芳澤公使を批評したとか。

「フランス型の外交官だね」

それから、二人は、おひ／＼に歩み寄るやうになり、遂に「日ソ協定」を締結する運びになつた。

そのカラハンが、外相代理として、北鐵護渡交渉にも當つたことは、まだ記憶に新しいところであ

る。

カラハンと言へば、彼よりもつと日本に近い關係をもつた、ヨツヘエのことを思ひ出さずにはゐられない。ヨツヘエは、例の後藤新平に招かれて、我が國へ訪れて來たのであつて、その表面上の目的は、自分の持病を直すといふ事にあつた。しかし、只だそれだけでなく、裏面には日露の折衝といふ重任を負つてゐたことは斷はるまでもない。彼は、たしか熱海あたりへ療養に行つてゐて、東京の精養軒ホテルにも暫く寝てゐたが、そこから歸國の途に就いた時は悲惨だつた。その患者用の自動車は、頭から纏帶した病人を乗せて、特に鐵道省の地下室を通り、昇降臺のそばまで運ばれてピタリと停つた。それから、擔架の上に横になつたまゝで、貸切りの一等寢臺車の中にする／＼と納まつたからだ。わが數十名の警官の護衛のもとに。萬事がさういふ風であるから、見送り人も少かつたが、この中には後藤新平は素より、川上(俊彦)公使などの顔が見えた。そして歸國するのやうやく快方に向つたので、ロシヤ全權としてルーマニヤに乗り込んだが、また重態に陥つた。そこで、

「生きてゐるよりは死んだ方がいい」

なんかと放言するやうになり、たうとうピストルを右のこめがみに當てて自殺したのであつた。

ところで、このヨツヘエも、先きに言つたカラハント、ともに極東通であつただけに、何かの問題が起つた時には、我が國の外交界のために惜しむべき事であつたかとも考へられる。

四、二人の失踪公使

ソ聯の肅正工作は、革命二十周年の當日までに、何んとかケリがつけられさうだと噂されてゐたが、今日になつてもなか／＼收まりさうにない。この調子でゆくと、當分は續くらしいが、それにしても問題なのは、いつも誰かが檢舉されると、直ぐ銃殺——死刑といふ極刑に處せられることがある。

この苛酷な死刑に就いては後述する積りであるが、その執行人の鞭の恐しさに、到頭行方も知れずに逃げ出してしまつた。外交官もある。それは、ルーマニヤ駐劄のソ聯代理公使ブテンコで、その駐劄國のゴーガ内閣崩壊の因を作つて、自國の大軍をルーマニヤ國境に集結せしめた、國際的怪奇事件の主人公として聞えてゐる。最初の内、かれの姿はフツツリと消えて判らなかつたが、忽然として、ローマの目貫きの大通りにあるホテル・ブラツに現れた。そこで、各國の新聞記者達が

ドツと押しよせて、二階にあるその居室を訪れようとしたものだ。すると、例の「私服」が一人玄關にゐて、イタリー宣傳省から發行された記者章見せろといふ。同國にある新聞記者はこの記者章無くしては、誰にも面會することが出来ない事になつてゐる。そして、目的の第二百二十四號室に近づいて見ると、そこでも私服に同様の要求をされ、やつとブテンコの部屋に入つた。暫く待つてゐると、やはり私服に守られながら、そこに現れたのが問題の主人公だつたのである。

新聞記者團は、かれの顔を見ると、第一に、その興味ある遁亡の経路を訊いた。しかし、今は時期が尙早であるとあつて、うまく避けられたが、アトで聞くと、次ぎのやうなコースをとつて逃げたものらしい、ブテンコは、公使館を飛び出したものゝ、自國のゲ・ベ・ウの目がこわいので、ブカレストにじつと潜んでゐた。序にいふが、ソ聯の内務人民委員會(内務省)にある海外部では、その駐劄公使の身邊までスパイしてゐるのださうな。そして、この間に四日といふ日が過ぎた。それから、彼はすつかり偽装し、質の旅券まで持つて、イタリーとユーゴ・スラウイアの國境をひそかに越えた。と同時に、自分の身許をミランのイタリー官憲に始めて打ち明け、その保護を受けて、無事ローマへ到着したのであつた。

ブテンコは、まだ三十四五の青年外交官であるから、その政治論にはナカ／＼熱がある。今日ま

で代理公使を勤めた彼も、最初は、文學者か新聞記者になつて終らうと考へてゐた。だから、ブーシキンや、トルストイや、ドストエフスキーなどの大文豪が出たロシヤが、カガノーキツチ（ソ聯の重工業委員長）のやうなユダヤ人によつて動かされてゐることを非常に喜ばない。そこで行はれてゐるものは盲目政治であつて、かのコルホーズ（集團農村）も、實は農民には公開された監獄に等しい。何故なら、出来高ばらひといふ美名の下に、毎月四五百ルーブルの金をもらつて、一足二百ルーブル以上の靴を買ひ、また一食七ルーブルの飯を食つてゐるではないか。勞働者の生活は、農民にくらべると幾らかいいが、それでも天國を夢見るのは馬鹿の骨頂だ。更に、外交官は、永く母國をはなれてゐたが故にお互ひの事情が判らず、その結果、本當に「首」をとられる者もある。だから、これ以上に、もうソ聯の國內事情を語る必要があらうか、と。

ところで、このブテニコ代理公使が失踪してから僅かに二ヶ月経つた日、ブルガリヤ駐劄のラスコーリニコフ公使も消息を絶つた。そこで、歐洲外交界には、また一大センセーションを捲き起したものである。と言ふのは、ブラツセルの一新聞が、そんなトビツク・ニユースを紙上に掲げたからで、それに依ると、同公使はやはり本國から歸國命令を受けながら、姿を消したものらしい。彼は妻君を伴れて、ソフィヤを出發したものの、途中から急に方向を變へてベルギーに走り、イリ

ーンといふ匿名を使つて、マース河畔にある親友某の家に身を寄せたといふのだ。

ラスコーリニコフ公使も、ブテニコと同様に失跡公使であるから、ソ聯の内情を良く傳へないことは勿論である。その言葉によると、近來、スターリンはますます神経過敏になり、政權の確保に苦しんでゐるだけで、側近者をも少しも信用しない。だから、赤軍を背負つて立つウオロシロフ將軍も、新任々々で今を時めくエジヨーフ内務委員も、また、外交界の要衝にあるリトウイノフの運命も、ただ時の問題として稱されてゐるだけだ。ウオロシロフの後任には、赤軍の政治部長メフリスガ、エジヨーフの後任にはヤコフスキーがそれ／＼擬せられてゐるが、かれらの運命も果敢ないものと言へる。農民は食糧の缺乏を訴へてゐるが、それは、一つには鐵道輸送力の不足から來てゐる。このために、サマラ方面では、四百萬ブードの穀物が腐敗し、數百萬ブードの穀物は、貯藏設備が不完全のために腐つてしまつた。農村出の赤軍兵士の不満は想像以上である。斯くしてスターリンは、今や自ら墓穴を掘りつゝあるのである、と。

いくらソ聯でも、海外にある外交官の失踪事件は少いのであるが、一方には、歸國したばかりの大公使が銃殺されたりしてゐるので、諸外國に對する印象が甚だ宜しくない。前に述べたカラハンなどは、その鬼畜にも等しい憂目を見てから二ヶ月目に秘密裁判が開かれ、ソツと幽霊判決が下さ

れたとの噂がある。先づ、そんな風なので、かれ等の「信任状」なるものは一向にアテにはならぬと言はれても、どうも致方がないのである。

五、白晝ミルレル將軍拉致さる

思はずベンが外れたが、ブテンコ、ラスコーリニコフ兩公使の失踪事件は、その蔭にどんな事情が潜んでゐるにしても、要するにゲ・ベ・ウの目がこわいからの芝居である。ところで、このゲ・ベ・ウの觸手は、單にソ聯人ばかりでなく、革命後、海外に亡命中の白系露人の頭上にも伸びてゐるのだ。いや、かれらに對する態度は、もはや辛辣と苛酷の程度を越えて頗る奇怪味をさへがしてゐるのである。

それは、昨年九月下旬に突如として起つた、謎のやうな白衛軍人會長ミルレル將軍の失踪事件によつて、明らかに説明されてゐる。この白衛軍人會は、ソ聯政府の施設を喜ばず、主としてパリに亡命した舊ロシアの軍人連が、かの國內戰の販將ウランゲルの意志に従つて成立したものだ。そして、現在では二百萬の將士を有し、その本部をバリーのリュ・ヂュ・コリゼ街に置き、機關紙

『歩哨』を發行してゐる。ところで、ミルレル將軍は何と思つたか、その日副官に一通の妙な置手紙を残したまゝ、一人で外出したものである。手紙の中には——正午十二時半にスコブリン將軍に逢ひ、それから二人でドイツ大使館の駐在武官シトロマンとウエルネルを訪れるつもり。仲介者は右のスコブリン將軍であるが、同人はダスタボ(ドイツ謀報局)に關係ある者らしい。萬一の場合に備へるために、この手紙を残しておく——と言つたやうなことが認めてあつた。そして、若し必要がある時には、それを開封してくれと頼んだのであつた。しかるに、かれの颯爽とした長髪は、その日以来どこにも見當らなくなるとは、誰が想像したであらうか。

と言ふのは、普段から時局を嚴守するミルレル將軍が、當日の午後八時に開かれる白系露人の一集會に現れなかつた事から、たちまち疑惑の雲が深くなつたのである。そこで、その集會の關係者たちは開會することが出来ず、念のために自宅へ電話で問合せを見ると、外出したまゝ歸宅しないとの返事。仕方がないから、いろんな方面を探して見たが、やつぱり所在が少しも判らない。その時、副官は、あの置手紙があることを思ひ出し、それを始めて來會者の前で開披して見た。すると、スコブリン將軍や、ドイツ駐在武官などに面會することが書いてあつたので、先づスコブリン將軍を會場へ招いた。最初同將軍は、言を左右にして應じなかつたが、最非にとの嘆願から、やつ

と姿を現はした。彼は、ミルレル將軍の置手紙が會場にあると知つてからは、大いに慌て出した。だが、將軍に逢つたかと聞かれても、また、ドイツ駐在武官を訪ねたかと聞かれても、それらを全部否定した。そして、結局、ミルレル將軍には絶対に面會しなかつたと答へたのである。だから、今度は、ドイツ大使館に照會して見ると、そこからも意外な回答を受けた。つまり、シトロマンとか、ウエルネルとかと稱する、さういふ姓名の軍人はゐないといふのだ。かくして、萬策盡きた會場の關係者たちは、それにそ涙を呑んで、到頭夜半の二時半に、ミルレル將軍の搜索願を警察に差し出したのである。

この場合、誰の眉をもひそめさせたのは、他でもない。スコブリン將軍であつた。同將軍は、ミルレル將軍の後任者として認められてゐただけに、皆んなの注目を引いた。だが、後には、ゲ・ベ・ウと握手して、かれを拉致することを手傳つたとの噂がパツと立つた。假りに、さうで無かつたとしても、他の來會者たちよりは一と足先きに會場を去り、そのまゝバリーからも行方不明になつたといふことは、どうしても怪しい。それから、早や三ヶ月も過ぎたが、このミルレル將軍の失踪事件の鍵はまだ握られない。しかし、今日では、同將軍がモスクワに拉致されて、ゲ・ベ・ウの監獄に入れられ、遂に死刑——銃殺されたものと信じられてゐる。

六、自由——死刑——銃殺

果して、ミルレル將軍は、あの泣く子も直ぐ黙るといふ、ゲ・ベ・ウの恐ろしい魔手に斃されたのであらうか。それは、我々にはまだ確言出來ない。が、この將軍は、武力をもつて、ソ政権を打倒せんとしてゐたので、秘密裁判のもとに私かに死刑に處せられたといふ説は、一應是認してよいだらう。

死刑といへば、第一次の革命があつた、リウオフ時代の新ロシアを思ひ出さずにはゐられない。何故なら、その革命の勃發と同時に一旦廢止された死刑が、また暫くして復活されたからだ。但し最初は、當時のヨーロッパ戰亂渦中にあつた軍役服務者にのみ適用される事になつてゐたが、それに就いて、例の首相ケレンスキーは、こんな如何にも苦しさうな辯解をしてゐる。

一予は先きに法相として、死刑の廢止を斷行したが、現在は陸相として之を復活しなければならぬ

そして、戦線から逃げ出した者などには、ドシ／＼、その適用を見たが、後になると、銃後にあ

る國民にも援用されるやうになつた。主なる條項を示すと、

- 一、叛 逆 者
- 二、敵國の间谍
- 三、敵國への降服者
- 四、攘亂を企てる者
- 五、人民の財産を掠奪せる者
- 六、殺人罪を犯せる者

等々に對して、容赦なく援用される事になつた。ロシア官憲が、かく一般國民に極刑をもつて臨んだのは、平和時代ではなく、戦争中だつたからであらう。

ところで、ロシアには、この死刑復活に飽くまで反對する者が無いわけではなかつた。その急先鋒となつたのは、當時の社會民主黨である共產主義者たちで、かれらはカデツト(立憲民主黨)や、社會革命黨の猛者を向ふに廻はして大いに戦つたものだ。特に、花々しい論戦は、ペトログラードの市會において展開され、かう文相ルナチャルスキーは獅子吼したのであつた。

「われ／＼ボリシエキキー(共產黨員)をからかふのにも程がある。若し政府が死刑を廢止しないの

なら、それを廢止して他のものに變へる力が民主黨側にはあるのだ」

かうして、兎に角にも、かれの熱心な主張が容れられ、同廢止案は大多数をもつて市會を通過したのである。

それ位であるから、第一次の革命が第二次の革命に代つて、ソ政権が樹立されると、無論、問題の死刑はたちまち廢止された。そして、今日に及んでゐるのであるが、皮肉にも、例の肅正工作以來、何んといふ夥しい人々が犠牲になつたことか。と言へば、第一に、この恐ろしい肅正工作に油をそゝいだ、レーニングラードの黨支部長キーロフの暗殺計劃を思ひ出さずにはゐられない。キーロフは、平日のやうに黨支部へ出かけてゆくと、そこへ一人の來客があつた。そして、不幸にも、この訪客に背後からピストルで狙撃されて、一大センセーションを捲き起したのである。ところ、この下手人のニコラエフは、現在のソウエト政治組織を全く否定してゐる。そのために、先づキーロフを血祭りに上げ、次いでスターリン、カガノーキツチ、オルジョニキーゼ、モロトフなどの要人連を暗殺することを企てたばかりではない。一方では、レーニングラードの某國領事と握手し同國の活躍に必要な資金として、大枚五千ルーブルを受けとつた。更に、同國の他の領事の手を経て、當時フランスに亡命中のトロツキーと聯絡を取るやうに斡旋されたと告白したので、かれ下手

人の運命はもう判つてゐた。つまり、この事件に連坐して、都合七十一人の者が逮捕され、内三人を除いて、全部の者が同時に銃殺される結果になつたのである。

再言するまでもなく、キエフの暗殺事件は、最初に、ソ聯の肅正工作に油をそそぎ、その後すこぶる大袈裟になつたものである。そして、この犠牲者が、實に三百萬人とまで算へる者がある位だ。しかし、いかなる理由があらうとも、かく大量的に人命を奪ふといふ事はどんなものであらうか。その事實は、たとへ彼の國の諸施設を百パーセントまで是認するものでも、人道主義の上から絶対に排撃されねばなるまい。

七、ゲ・ペ・ウの後進新選組「グゴボズ」

それは兎に角として、ミルレル將軍の失踪事件は、その餘波として、こんなゲ・ペ・ウに關する新事實を白日下に曝け出した。と言ふのは、この有名な秘密警察に代る「グゴボズ」(略稱)と稱するものが再組織されて、世界的に存在してゐることが看取されたからだ。この諜報機關の命令は、各國の情報を集めると共に、また赤化工作にも努めることにある。だから、かれら諜報員が目を皿の

やうにして、白系ロシア人による集團の動きに注意してゐることは斷るまでもない。ミルレル將軍だつて同じで、かれが平生居住する「白衛軍人會館」には、或る自動車會社のガレージの看板が出てゐるだけなのに、いつか喚ぎ出されてしまつたのであつた。そして、フランス國內には、その諜報支部が十二ヶ所も設けられてゐる。内、パリ一だけにも三ヶ所あつて、ソ聯大使館と巧みに連絡をとり、極秘裡に、フランスの共產黨員を手先に使つてゐるといふ話。

いづれ、この「グゴボズ」の網は、支那全土にも隈なく張り巡らされてゐることだらうが、かれら密偵の目は、決して動亂スペインをもり遁がしはしなかつた。ここには、俗に「ボウム」といふ政敵トロツキストの大きな諜報機關があるからだ。その諜報機關には、大勢の者が雇はれてゐるばかりか、特殊のラヂオまで備へつけて、そこに集る情報を各地に傳へてゐた。無論、これらの情報は、政府側に不利なものばかりであつて、主にソランコ軍に手渡されたのである。そこで、當局の斷壓を受けて、たうとう解體を餘儀なくされたが、この潰滅の蔭に「グゴボズ」諜報員の暗躍があつたことは否めない。これと前後して、やはり多くのトロツキストたちが宿泊してゐるホテル「フアリコン」が、突然、官憲の手によつて搜索された。そして、トラツク五臺分の重要證據書類と武器若干とを押収したとか。

ところで、イタリーでは、反対に、この「ゴゴボズ」の諜報員が檢舉された事がある。夫れはいゝとしても、首魁と見られるド・グリゴリエフがたゞの人間ではないので、急に問題の波紋を大きくした。何故なら、かれはスターリンの従兄であると考へられ、實に三十年の禁錮に處せられたからだが、むろん眞偽のほどは判らない。なほ、他の十三名は、それ／＼十年又は二十年の長い懲役を申し渡されたと聞いてゐる。

斯くして、「ゴゴボズ」の諜報員は、今日、ソ聯から世界各国へひそかに送り出されてゐるやうである。しかし、また、その各國からも、自國のスパイがソ聯に送り込まれてゐるのは、一つの大きな皮肉と言つていゝ。次ぎには、「ブラーウダ」紙の記述によつて、この事を少しく書いて見よう。

八、「日本人スパイ」とは？

ソ聯の領土内に入り込んでゐる各國のスパイの内、もつとも活躍してゐるのは、何んといつてもドイツの諜報機關「ゲスタポ」であらう。「ゲスタポ」の諜報員は、時と場所により、いろんな假

面をかぶつて活躍してゐるが、その常套手段ヒヤウハウシヨウダンとしては、いはゆる「合法的な」方法を選んでゐる。

つまり、彼等は、同聯邦から臨時的に招かれてゆく、各種の専門家並びに技師に化けて忍び込むのだ。さう言つて悪ければ、自分の出發前に、否が應でも、この諜報機關から、これ／＼といふ命令と指圖サシヅメを受けて入國すると説明してもいゝ、そして、歸國した時に、そこから得た諸情報を「ゲスタポ」に傳へることを強ひられてゐるらしい。ベルリンには、これらの諸情報を比較的早く入手し、また整理するために、「リユクワンデレラムト」と稱する特殊な機關が設けられてゐる。これは、實は、ソ聯からの歸來者の世話をする役所なのだが、裏面においては、今も言つたやうなスパイ事務を取り扱つてゐるのださうな。だから、そのモスクワなり、ウクライナなりに出かけてゆく又は、そこから歸つてきた者は、どうしても一度は、この役所の門を潜ひそらずにはゐられない。でなければ、たとへ優秀な腕を持つてゐても、とかく自分の仕事を見付けることが困難なのである。

もう一つ、これと同じやうな團體があるといふのは、ドイツの「ロシヤ工業協會」のことを指すのだが、別に同團體の設立目的をくどくしく聞く必要もあるまい。と言つても、この團體の事業を、その表看板どほりに想像するなら、飛んでもない間違ひにならう。何故なら、首魁者は、あの革命前後の國內戦時代に、獨軍がウクライナに侵入した時、大いに武勳を立てた老スパイだから

だ。端的にいふと、これも、ドイツの有名な諜報機關の一つなのである。

さて、「ゲスタポ」は、いかにして自己のスパイをソ聯に送つてゐるかと言へば、かれら諜報員が目をつけてゐるのは、先づ諸海港にあるドイツ經營會社の支店だ。「米穀輸出會社」もさうなら、「輸出トラスト」もさうである。ところで、これに似た農産物を輸出する「ドルザグ」といふ會社は、例の肅正工作のあふりを喰つて、相憎、尻ツ尾を握られてしまつた。その發端は、同會社の支店長チトロフが、前のドイツ參謀部大佐であるといふ事から「足」がついたのだとか。そして、會社内のスパイ部では、大なり小なり、ソ聯内に諜報機關を設けることまで指令されてゐたのである。

同じやうなスパイ戦線に躍つて、たちまち檢舉されたのは、他の一團體「輸出品検査所」である。と言ふと、その名稱を見て、變に思ふ人があるかも知れないが、これはお役所でも何んでもない。實は、ドイツ向き輸出品の重量や品質を調べるところのだが、それをいゝ事にして、こそ／＼と良くない藝をやつてゐたのだ。いや、支店長のXはなか／＼の辣腕家らしく、こんな大がかりな芝居まで打つてゐた。彼は、はじめ、高等技術學校の教師で、帝政時代の參謀大佐であつたPといふ男を近づけた。そして、その蒐集した情報を通じて「ゲスタポ」に傳へてゐたのだが、後に

は、次ぎのやうな長期的謀計をも企んだと言ふのは、この學校教師をして、かれが教へ子の中からひそかにスパイ志願者を募つたばかりではない。やがて技師か何かになつて、各經濟部門に進出してゆく卒業生にも、同一目的をもつて働きかけたのである。

ところで、もつと大それた、そして獵奇的な興味をさへ唆るやうな犯罪の主人公も、やはりX支店長である。彼は、前記のPのほかに、Mといふ女をタイピストに雇ひ入れて、この若い女性をもスパイにした。と言つても、最初は、「ゲスタポ」の仕事を面白がる人々を自分の方に引き入れる位だつたが、何時か深入りしてしまつた。と氣がついた彼女は、急にヒステリカルになつて、何時支店長をゲ・ベ・ウの手に渡さないとも限らぬ容子を見せた。だから、支店長は大いに驚いて、こゝに彼女に對する殺意を抱いたのである。どうしたかと言ふと、この女タイピストを休養させるために、モスクワ・カザン間の鐵道沿線にある地方へ出發させた。もつとも、一人ではなく、彼女のうしろには、ちやうど影の形に添ふごとく、いつも支店長が付きまとつてゐた。そつとピストルを用意しつゝ。これは——汽車の中でも同じだつた。だが、少しもいゝ機會がなく弱つてゐたが、遂にチャンスが來た。それは彼女が昇降口に佇んでゐるのを見たので、ドンと背後から突き出して、哀れにも車輪の犠牲にしたと言ふのである。

無論、「ゲスタポ」は、いはゆる合法的な方法ばかりでなく、また、非合法的な方法をもつても、その使命を果たさうとしてゐる。たとへば、自己の諜報員をドイツ共産黨に入黨せしめ、いかにも反ファシストのやうに仕込んでから、いよいよソ聯に送り出す。そして、本物のコムニストの仲間入りをさせるのだ。かういふ連中は、單に政治機關ばかりでなしに、時としては、社會團體その他にコソソリ忍び込む場合もある。だが、どちらかと言ふと、彼等はスパイの豫備軍のやうに考へられ、戰爭勃發の際などに役立たせようとしてゐる。一方、ソ聯に移住してゐるドイツ人、又はかれらの子孫をして、常住的スパイ軍にもしやうとしてゐるのだ。中でも、レニングラードを擁するバルチック地方や、多くの同胞がゐるウクライナとポウオルジェ方面において、特に力縮を入れてゐるのである。

共産黨紙ブラーウダの言葉によると、ソ聯の領土内には、「ゲスタポ」のほかには、イタリーのスパイも、フランスのスパイも、日本のスパイもドツサリ入り込んでゐると言つてゐる。序に、その『日本のスパイ』(?)と稱する人間に對する官憲の神經過敏さを、ちよつと紹介しておかう。と言ふのは、西部シベリヤにあるクラスノヤルスクでは、ある労働者の新聞が發行されてゐる。ところで、この新聞の劈頭に、「トロツキー派の日獨スパイの擁護者に對して」といふ、ブラーウダの

社説が轉載されたものだ。だが、その表題をよく見ると、「獨」の上に「日」の字がある筈なのに、それが無い。だから、これは、我が國のスパイに好意を有つ者の仕業であるとあつて、同新聞社全體が疑惑の目をもつて見られるやうになつた。しかし、調査の結果は、校正子の間違ひと判つたがその机の上にトロツキストの編纂になる字典が発見されたので、問題はまた再燃した。そして、編輯長ばかりでなく、この新聞の發行地であるクラスノヤルスク地方の黨責任者まで大目玉を喰つたとは、餘り笑へぬ笑話である。

九、反ソ的怪放送を聴く

こんな風に、ソ聯全土に亘つて、各國のスパイ群が亂舞するやうになつたのは、そも／＼如何なる理由に因るのであらうか？ それは、最近ますます急迫を告げてきた、國際情勢にも關係はあるが、そのもつとも大きな發火點は他にあると思ふ。つまり、例の十年前における幹部派と反幹部派との争闘、もつと端的にいふと、スターリンとトロツキーとの反目にあると考へたい。この時以來兩者の間にはさかんに火花が散らされ、今日までも餘焰が絶えない。言ふまでもなく、かの『平行

本部」事件や、「合同本部」事件などは、皆んな反政府的なトロツキストたちの憤怒に燃える爆弾だつたのだ。それと前後して、赤軍陰謀事件が起つたことも、今更断はるまでもあるまい。そしてこれらの諸事件に次ぐ肅正地獄は、いよいよ同聯邦を蜂の巢のやうに突ツついて、共産主義國の醜い半面を世界の前にさらけ出したので、斯くはスパイ群の襲來となつたのである。

そこで、スターリンの一派——コンムニストたちのトロツキー排撃熱は高潮して、キリストを賣つた「ユダ」の名を以て、かれを呼んでゐる。さうかと思ふと、ウオロシローフ將軍などは、「あの野獸的なファシスト」とまで極度に罵倒してゐる。しかし、當のトロツキー派の潜在力は、まだ根こそぎにはされてゐないらしい。そのことは、ソ聯の領土内に「トロツキー大衆」なるものが存在してゐると、いつかスターリンが喝破したのでも判る。そこで、第一に、かれは防弾チョッキを着込み、自分の乗つてゐる自動車の番號札をはづして、暗殺者の目を晦ましてゐると聞く。赤軍將校の腰にブラ下がつてゐるピストル・ケースは、いつも空ツぽにしておくやうにと命せられ共産黨員でさへ、この際は不用心だとあつて、ピストル携帯を禁じられてゐる。そして、軍用飛行機にも爆弾が積まれてゐないのは、その恐ろしい爆弾が敵の陣地へではなく、クレムリンの尖塔上に落つところはしないかを心配するためだと傳へられてゐる。

ところで、最近着のワルソー電報——この電報はヨタを飛ばすので有名だが——は、又復、こんなセンセーショナルな事件を報告してゐる。それによると、平生、スターリンと、その近親者を護衛してゐるゲ・ベ・ウ軍の將校五名と兵卒三十四名とが、にわかにならして逆し出した。そして、スターリンの自邸から、ウオロシローフ將軍の邸宅まで襲つて、かれらを一舉に暗殺しようとした。といふのは、極東軍司令官ブリユツヘルか、赤軍參謀長シャボニコフを首班とする、純然たる軍部獨裁政治を押つ立てるためだ、と。しかし、内務人民委員會(内務省)のサコフスキー次長が、この陰謀を逸早く嗅ぎつけたので、幸ひにも無事であつたといふのである。

若し、この暗殺計劃が成功したら、それこそ大騒ぎだが、その以前から、かれら共産黨巨頭のあたまを悩ましてゐたのは、例の反ソ的怪放送事件である。三月以來、この怪放送は、「秘密反スターリン放送局」の名のもとに續けられ、モスクワつ兒の神経を、いやと言ふほど尖らせてゐるさうだ。そして、さかんに赤軍に呼びかけたり、花やかなるべきメーデーを野次つたりしたとか。曰く

「わが解放者同盟は、スターリンの政權を打倒して人民政府を樹立し、農業問題を解決すると共に私有財産制度を復活せんとするものである」

また曰く――

三二

「来る五月一日のメーデー當日、赤軍の將卒たちは、街頭において、スターリン書記長及びエジヨロフ内務人民委員長にたいする反對デモを敢行するだらう」
ところが、この放送の内容は、ソ政権の要路者にとつて如何にも忍びがたいものなので、かれらは何んとかして防ぎたいと思つた。でも、その放送の場所が、毎日いろ／＼なところに變るので弱つてしまつた。だから、官憲は、方向探知機を据えつけた装甲自動車を動員し、血眼になつて市中を探し廻つたが、やつぱり敵の本據は突き止められない。で、それが聞え出す午後九時半を期して中央放送局に雑音をもつてこれを攪亂することにした。しかし、一時は、その二つの電波がヨーロッパの空を蔽ふので、皆んな大きな興味をもつて聞き耳を立てたといふ話である。

一〇、大きな悩みをもつソ聯

今、ソ聯は大きな悩みを有つてゐる。しかし、それは、必ずしも國民の反逆ばかりを指すのではない無論、かれらの一部には、國家の柱石であるスターリンを斃さうとした者もある。その國防の

重大責任を脊負つて立つウオロシロフ元帥を葬らうとした者もある。そして、共産黨の有力者キーロフは、遂に、その血祭りに擧げられてしまつた。以下、經濟機關の破壊、農産物の不作、鐵道運輸のトポタージュ等々を指摘するなら、國民の罪も決して輕くはない。まして、かれらの言ふフアシストの敵が各國境にひし／＼と迫つてゐる今日においては、尙更である。

そこで、例の共産黨機關紙「ブラーウダ」は、政府の御用新聞「イズウエスチャ」と聲を合はせて、こんな表題の社説を紙面のトップに堂々と掲げたものである。「右翼トロツキストのスパイを容赦なく威嚇しました掃滅せよ」と。言ふまでもなく、これは、ソ聯指導者の代辯者として、全國民の注意を喚起したものだ。それだけに、可成りの感激を以て綴られてゐるので、その中にはスローガンめいた言葉が少くない。念のために、その四つ五つを紹介して見よう。

「わが黨は――社會主義の參謀本部である」

「最も尖銳にして殲滅的な武器は――ポリシエキズムである」

「各コンムニストをポリシエキズムを以て武装せしめよ」

「看視は――何よりも重大なコンムニストの思想的武器だ」

「われ／＼は、わが祖國に反逆する最も憎むべき敵を凡ゆる獸穴から狩り出し、狂犬の如く撲滅す

三三

るであらう」

だが、かれらの『警告』は、單に新聞紙を通じてのみ發せられてゐるのではない。雜誌に、小冊子に、ポスターに、映畫に、集會に、その他凡ゆるものを利用して宣傳されてゐるのである。

しかし、ソ聯民の反逆には、大抵の場合、資本主義的諸國の後立てがある。現在の海外の出版物やフィルムの入を禁じたばかりか、かれらの旅行をも中止せしめた。と同時に、ロンドンや、パリや、乃至ベルリンにある外國旅客局の支部をさへ閉鎖せしめたのだ。一方、外國の入國者をも出來るだけ制限してゐる。斯くして、ソ聯は、こゝに鎖國主義の旗を翻へすことになつたのである。

今後、鎖國主義下のソ聯はどこを指して進むであらうか？ いづれにしても、その結果は、諸外國との關係が疎漫になるだらう。また、國內を見ても、總ての部門が後退するであらうことは、誰の眼にも想像される。残るものは、コミンテルンだけであるが、日獨伊の防共戦線が張られてゐる今日においては、如何なるゲリラ戦術に出るか兎に角、ソ聯の前には、革命二十年間に始めて逢着した大きな暗礁が横たはつてゐると考へられるのである。(完)

◎ 版社版出亞細亞 ◎

(錢三金冊各料送)

大野 慎著	戰時議會と政局の動向	定價 金二十錢
尾瀨 敬止著	各國女兵士の出現	定價 金十錢
鈴木 治郎著	ソ聯の國境を衝く	〃
鳥山 景三著	死の神祕相	〃
尾瀨 敬止著	樺太國境の實狀	〃
大野 慎著	革新日本精神の根源	〃
内閣情報部編註 小松 孝彰著	現地を語る	〃
豊島 信一郎著	赤色ロシアの國民生活	〃
宮川 春夫著	商賣の裏表	〃
豊島 信一郎著	グ・ベ・ウの正體を暴く	〃
大野 慎著	世界改造の發火點	〃
深町 すみ子著	男讀むべからず	〃
京山 若丸著	皇軍慰問の旅	〃
石田 一松著	指相と運命	〃
松原 宏整著	謎のソ聯赤い女の内幕	〃
G・P・U著	猶太人と商賣繁昌虎の卷	〃
岡大講師 岡田 博道著		

月刊雜誌

喫茶街を中心とした

スマートな流行雜誌

喫茶街

菊判總アートの豪華版

定價三十錢

發行所 亞細亞出版社 振替東京七二五七番

ソ聯をスパイする

定價十錢

昭和十三年六月十八日印刷
昭和十三年六月廿一日發行

著述者 尾潮敬止

編輯兼發行所 清水治藏

印刷所 大森印刷所

東京市下谷區車坂町八九番地

發行所 大陸書院

電話下谷(83)四七六七番
振替東京七一、五二七番

配給所 亞細亞出版社

大阪市北區堂島上二ノ二五

京阪神特約店 新正堂書店

〔特約〕 東京鐵道局公認 (鐵道保養會・鐵道弘濟會) 啓徳社

全各國驛賣店・ホム・街頭新聞・スタドン・有名書店にあり

終

